様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０８２７

研究課題名（和文）文化的課題としての察し―対人知覚の文化的スクリプトの検証

研究課題名（英文）Cultrual Script of Person Perception

研究代表者
唐澤　真弓（KARASAWA, Mayumi）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：６０２５５９４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,800,000円、（間接経費）　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：他者の心的状態の推測である「察し」はいかなる文化にも存在する。しかしながら、そのプロセスは文化によって異なることが、多くの文化心理学的研究から予測される。本研究では、「察し」とは、文化的自己観を用いて対人知覚をする傾向のことであると考え、その機能の文化差を明らかにするために、文化的自己観に関連する他者理解尺度、心の理論、エモーショナルインテリジェンス、思いやりを基にした察し機能尺度を作成し、さらに実験課題における対人知覚傾向と察し機能との関連を文化心理学的視点から検証した。日本においては相互協調的対人知覚傾向が高いと察し機能得点が高くなる傾向が見られた。

研究成果の概要（英文）：Purpose of this study is to identify cultural script of understanding others. We hypothesized that those who has cultural-self tendency of their own culture showed higher score of understanding others. To examine this hypothesis, we develop the understanding others scale, "Sasshi" based on Emotional Intelligence, Adult Theory of Mind, and Sympathy scale including independent aspects of person perception and interdependent aspects of person perception as well to explore cultural scripts of understanding others among Japanese students. To examine relationship with cultural task, we run experiment study of judgment of others emotional situation as cultural task. In Japan, this hypothesis has partly confirmed. Those who did high score of "Sasshi" showed more tendency to interdependent interpersonal perception. These results suggested that some limitation of behavioral and attitude level analysis and future perspectives in cultural psychology.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：文化心理学　対人知覚　察し　文化的課題

1.　研究開始当初の背景

文化心理学では、人は、自らの文化に付随する文脈に沿って適応的に行動しようとつとめるその結果、その人独自の一連の反応傾向や認知的志向、感情、目標や価値の構造を含む心理プロセスが形成されていると考えられている(e.g., Markus & Kitayama, 1991)。洋の東西を巨視的に比較し、２つの文化における人間関係の違いを相互協調的自己観と相互独立的自己観とし、文化心理学においてはさまざまな対人知覚研究が行われてきた。個の独立に根ざした、「相互独立的」な人間関係が優勢な西洋では、他者を社会的背景から切り離されたものとして見ることになる。これに対して、東洋には個を社会的ネットワークに埋め込まれたものとして見る、「相互協調的」な人間関係があるとされる。その結果、他者を社会的背景の一部として考える傾向が生まれると考えられる。たとえば、他者の行動の原因帰属の研究（Kitayama, et al, 2009）では、アメリカ人やヨーロッパ人（イギリス人とドイツ人）は、行動の原因を内的属性に帰属する傾向が強く、日本ではその傾向が弱いことが示されている。また、対応バイアスの研究では（e.g.,Masuda & Kitayama, 1996）、ヨーロッパ系アメリカ人では、個人の特性と行動との一貫性を示す他者知覚が強いのに対して、アジア人ではこのような傾向が弱いか、ことによるとほとんど生じないことが知られている。

申請者は、こうした文化と自己の分析に基づき、５つの独立的・協調的傾向の測定課題を同時に実施し、文化間文化内の変動との関連について、検討してきた。日米英独の大学生を対象に、文化的自己観尺度、原因帰属、線と枠課題を実施したところ、従来の研究と同様に、日本人は相互独立的自己観の傾向が３つの欧米文化群よりも低いこと(より相互協調的である)が示され、文化にある対人関係と共振する心理プロセスがあることが示された。また、アメリカ人とヨーロッパ人の間でも差がみられ、文化内差の分析の必要性が明らかになった。ヨーロッパ人と比べアメリカ人は、おそらくはその移民の歴史の故に、個人主義的心理傾向をより強く示す。このような歴史を持たないヨーロッパ人は、集団主義的傾向の強い日本よりは個人主義的であるが、アメリカ人ほど個人主義傾向が強くないのである。さらに興味深いことに、こうした文化間の見いだされた課題間の相関は４つの文化でいずれもほぼ０に近かった（平均すると r=.07）ことが明らかになった。このことは、文化心理学研究における方法論的理論的展開をもたらすものである。従来、個人志向とか対人志向といった傾向は、各人の持つ比較的永続的な心理特性であるとされることが多い。しかし上述の結果は、独立・協調の概念を個人の特性とすることは困難であることを示すものである。これについて、文化的課題理論によって説明することが可能であると考えられる。

他者の心的状態を推測する機能、つまり、察し機能は、すべての文化で見られるものであるが、同時に、その形態は、特性の文化における「人」についてのモデル―文化的自己観―によって大きく異なると考えられる。言い換えれば、文化的課題を果たそうとするものであれば、そこにある対人的情報の知覚にはより敏感になると考えられるのである。文化的課題とは相互独立的自己観、相互協調的自己観といった文化にある価値を達成するための手段であり、文化の基本的構成要素である慣習のことを意味する。この課題を繰り返し実践することを通じて人の暗黙の心理傾向は獲得される。さらに、自らがこの課題を達成する価値を認め、それに適応しようとする自動的自発的な意図によって実践される。この文化的

課題理論では、これまでの文化比較研究によって得られた日本人とアメリカ人の違いは、文化それ自体によって受動的に引き起こされるわけではなく、文化にある課題に主体的に向かった人間によって可能となると考えるのである。どの文化的課題に適応しようと考えるかは個人により異なることになり、その結果、上述のような課題間の相関をもたらさないと予測できる。文化課題の認識が文化差と世代間差や年齢差といった文化内の変動を説明すると考える。しかし、文化的課題理論にもとづく実証的研究はまだほとんど行われていない。

2. 研究の目的

本研究では、文化的課題、とりわけ他者の心的状態の推測はいかなる文化にも存在する文化課題であることに着目する。「察し」とは、文化的自己観を用いて対人知覚をする傾向のことであると考え、文化差を説明できることになる。人の気持ちを察する傾向を測定し、この傾向が高いほど文化固有の人間関係のモデルを用いがちであるという仮説を一連の研究で検討する。

文化的課題にはさまざまなものがあるが、とりわけ他者の心的状態の推測はいかなる文化にも存在する文化課題である。文化にある人間関係は、認知的表象として内面化され、社会的知覚の際の一種のフィルターとして機能する。この観点からいうと、人の心を推測すること、つまり、「察し」とは、文化的自己観を用いて対人知覚をする傾向のことに他ならない。つまり、個人がどの程度人が他者の心的状態を察しようとするかにより、文化差がもたらされると考えられるからである。本研究では、人の気持ちを察する傾向を測定し、この傾向が高いほど文化固有の人間関係のモデルを用いがちであるという仮説を一連の研究で検討する。

相互独立的自己観のなかでは、人は自由で独立したスクリプトがあるとされる、したがって、察しがよくできることは、文化的心理傾向となる対人知覚-分析的対人認知を助長することになるであろう。それに対して、日本のような相互協調的自己観のなかでは、人は関係志向的となるスクリプトをもち、それにあわせた行動をすることが、包括的対人認知を助長することになるであろう。

3. 研究の方法

研究１．察し機能尺度の作成

発達の初期における社会的参照(Walden, Tedra A., & Tamra A. Ogan, 1988）にはじまり、他者の心的状態の理解はさまざまな研究で測られてきた。他者理解の基盤となる心の理論研究は、幼児を対象とした実験（e.g., Wellman, Cross, & Watson, 2001; 子安 1997；Naito&Koyama, 2006）から成年を対象とした“大人の”心の理論（Yoon, et al, 2010 など）まで幅広く展開されている。また、他者の心を読む能力は Emotional Intelligence(Salovey & Myer,1990)として、測定されてきている。さらに、日本的尺度として、他者の感情的理解となる思いやり尺度も示されてきている。ここでは、こうした複数の尺度をあわせて察し尺度を作成した。

General Theory of Mind 尺度

対人的理解について、ビジネスマンを対象に開発された尺度。概念的構造的妥当性と共に脳指標による確認もなされている。10 項目 5 件法からなる。

日本語版 MSCEIT

Emotional Intelligence については多くのスケールが展開されているが（Salovey, P., & Mayer, J.D. 1990 Emotional intelligence. Imagination, Cognition, and Personality, 9, 185-211.)、ここでは、Salovey たちの開発した尺度の日本語版の

うち、対人関係および状況対処についての項目を用いる。

思いやり尺度

他者の心を理解する“思いやり”について検討された内田らの尺度（内田由紀子・北山忍 2001 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究 72 (4), 275-282.）を用いる。

これらの尺度を合成し、察し機能尺度を作成した。その上で、日本人大学生 203 名に質問紙を実施した。

研究２．文化的対人認知課題実験

察し機能が高いことは、文化にある人間関係、文化的自己観を達成しようとする傾向が強いことになる。対応バイアスの実験を行い、従来みいだされてきた文化差がみられる程度が察し機能により説明できることを検討する予定であったが、先行研究の追試ができなかった。これは翻訳の可能性、刺激写真の文化的バイアスなどが考えられ、さまざまな検討を行った結果、被験者への時間的負担も考慮し、課題として取り入れないこととした。

あらためて、察し機能による対人認知の文化差の実験を行うこととした。これは文化と認知研究で取り上げられた包括的−分析的対人認知課題を用いて、察し機能との関連を検討し、文化差が察し機能という文化的課題への個人の取り組みによって説明できることを検討するものである。ベルギーではオランダ語に訳され、大学生 60 名を対象に実施した。日本では、大学生 246 名を対象に実施した。

4．研究成果

・察し尺度の開発

既存の尺度に基づいて下位尺度ごとの得点を算出し、信頼性分析を行った。

「思いやりの心」α=.711、「適応能力」α=.621、「他者の本心を理解する能力」α＝.774、「他者の思考を分析する能力」α＝.670、「コミュニケーション能力」α＝.516「情緒の認識と理解」α=.931、「情緒の表現と命名」α=.913、「情緒の制御と調節」α=.776 であった。いずれの信頼性も、文化比較を行う上で、妥当な尺度であることがわかった。

・文化的対人認知課題

他者の感情認知において、包括的・分析的認知が見いだされるかどうかを検討するために、対人情報判断における背景情報理解得点の結果を比較した。これまでの研究で明らかになった通り、日本ではベルギーよりも対人背景情報に敏感であった。しかしながら、先行研究での結果と比較すると、ベルギーではアメリカよりより包括的情報選択の傾向があることがわかった。

表１　日本ベルギーアメリカの対人背景理解得点の正確度の平均値

	Bel	Jap
Original cartoon	0.81	0.85
Change clothes background	0.22	0.14
Change clothes target	0.15	0.17
Change emotion background	0.46	0.66
Change emotion target	0.83	0.91

また、文化的課題における課題の主人公の違いについては、大変興味深い結果がみいだされた。ベルギーの結果では他者の感情理解において、他者の属性（アジア人または白人）との関連が明らかになった（図１）。日本ではこの差異が見いだされたなかった。このことは日本における他者理解がより繊細なものであるためかは今後の検討が必要である。

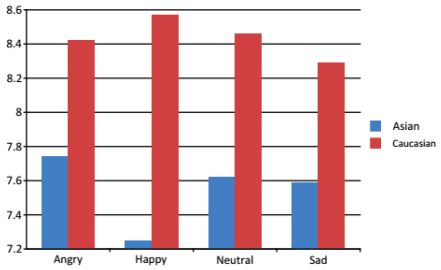

図１　ベルギー大学生の怒り感情理解得点

また、日本では察し機能と文化的課題との関連を検討したところ、ゆるやかな相関がみいだされた。このことは、文化的課題への適応度が高いことが対人理解を促進するといった仮説の一部を支持するものである。しかしながら、今後さらなる分析を行うことが必要であった。

ここでの結果は、文化的課題（行動指標）と察し機能（態度評価）との関連を示すものであった。主体的に文化に適応するよう自らの心を生成するという文化心理学の基本的考察を、文化的課題によって説明し、文化に生きる人間の心を明らかにする当初の目的の一部をわずかながらも果たしたといえるだろう。従来の文化比較研究では、自己の枠組みやそれに基づく心理傾向が扱われていることが多かったことに対し、どの文化的特質が自己を生成し、またその自己がどのように文化を維持するのかについての文化と自己の相互構成過程を示す研究として、新たな結果を提示したと位置づけることができるかもしれない。しかしまた同時にこの方法での限界も示している。今後脳指標や生理指標での検討を行い、そのプロセスを精緻化していく方法を考え出すことが必要であろう。

5.　主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　3　件）

Karasawa, M.(2011)Divergent predictors of health and wellbeing in the United States and Japan － ISRE 2011 in Kyoto,JAPAN(International Society for Research on Emotion)(2011.7.26)

〔図書〕（計　1　件）

唐澤真弓（坂本他監修）『心理学辞典』27章　文化、誠心書房（印刷中）

6.　研究組織

(1)研究代表者

唐澤　真弓（KARASAWA　Mayumi）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：60255940